

小規模校における気になる子どもの支援体制の在り方 —特別支援教育コーディネーターとしての取り組みを通して—

水戸市立上大野小学校

山口 照 美

キーワード：特別支援教育コーディネーター、小規模校、気になる子ども

1. はじめに

本校は、周りを田畑に囲まれ、三世帯同居の家庭が多い地域にある。全校児童数113名（平成18年1月）の小規模な小学校である。全学年単学級で、特殊学級や通級指導教室はない。また、現在、本校には、特殊学級や通級指導教室、養護学校等での専門的な知識や経験を有している教職員はいない。

本校のような小規模の学校において気になる子どもたちを支援していくためには、小規模の学校の特徴を生かした校内支援体制の構築が必要である。そこで、平成16年度から2年間にわたっての本校における特別支援教育コーディネーターとしての取り組みを通して、小規模校における気になる子どもの支援体制の在り方を考察した。

表1. 担任がとらえた「気になる子ども」の姿
(平成16年9月実施上大野小学級担任6人)

2. 研究の実践

(1) 平成16年度の取り組み

①「気になる子ども」のとらえ

校内において、担任に学習面や行動面で困難を抱えていると思われる子どもについて調査したところ、表1のように子どもたちの気になる様子が見られた。このような子どもたちの中には、LDやADHD、高機能自閉症等の傾向のある子どものほかに、生徒指導上の問題のある子どもや身体的な配慮を要する子どもなども含まれている。

- ・繰り返し練習しても、計算の仕方や文字の習得ができない
- ・黒板の写字に時間がかかる
- ・学校生活のルールが守れない
- ・友達と頻繁にトラブルになる
- ・教室から飛び出す
- ・孤立しがち
- ・整理整頓が苦手・話が聞けない
- ・宿題や学習用具の忘れが多い
- ・学校生活に常に不安をもっている

本校では、こうした子どもたちを「気になる子ども」ととらえ、学校全体で支援に取り組むこととした。

②サポート委員会の設置

校内の支援体制づくりとして、全教職員で構成するサポート委員会（校内委員会）を立ち上げた。そこでは、気になる子どもの学習面や行動面の実態を記入した支援カルテをもとに、学期ごとに支援の仕方について話し合い、話し合われたことを支援カルテ（個別の指導計画）に記録した。また、LDやADHD、高機能自閉症等の障害について文献や出張報告等を利用して、校内研修を行った。

③平成16年度の校内支援体制の見直し

校内の職員にアンケートを実施したところ、平成16年度の校内支援の成果として表2のような結果が見られた。

表2. 平成16年度の校内支援の成果（平成16年5月16日実施 上大野小教職員のアンケート）

- ・校内の教職員にアンケートを実施したところ、表2のような成果が見られた。
- ・校内の「気になる子ども」の情報が共有できた。
- ・LDやADHD、高機能自閉症等についての理解が深まった。
- ・サポート委員会で他の先生の支援方法を知り、個に応じた指導を心がけるようになった。
- ・サポート委員会で悩みを聞いてもらい、気持ちが楽になった。
- ・支援カルテにより、学年末の「気になる子ども」の引継ぎが以前よりスムーズになった。

一方で、「専門的な知識や経験の不足で、指導の手立てがよく分からない」「学級に気になる子どもが複数いて、担任一人では十分な指導ができない」「周りの子どもたちの理解が深まらず、本人が学級で孤立しがち」「支援カルテを書く時間や、話し合う時間を確保するのが難しい」「家庭との連携協力が十分でない」等の課題が出た。そこで、以下のような取り組みを行った。

(2) 平成17年度の取り組み

① 支援の流れの明確化

教職員が共通理解を図りながら支援するため、今年度 第1回目のサポート委員会で、図1の「支援の流れ」を提案した。校内全体で「気になる子ども」の支援にあたり、必要に応じてケース会議を開きチームで支援を行う。また、定例の校務会で、「気になる子ども」たちの情報交換や、支援カルテの記入等の時間の確保を新たに位置付けた。

② 校内支援年間計画の作成

「気になる子ども」への支援が計画的、系統的に学校全体で行えるように、コーディネーターが中心となって作成した。話し合う時間が多くもないことを考慮し、前期と後期に分けて支援計画を立てることとした。支援方針の変更等がある場合は、ケース会議等を取り入れ対応する。また、学期に1回、家庭向けに特別支援教育の理解啓発のため、学校だよりに特別支援教育に関する情報を掲載することとした。(表3)

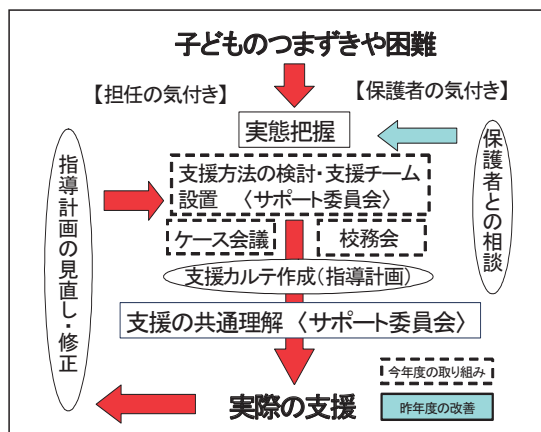


図1. 明確化した支援の流れ

表3. 平成17年度 水戸市立上大野小学校「気になる子ども」に対する校内支援年間計画(案)

	月	おもな取り組み	支援組織	関連行事等	準備資料等	校務会	学校だより
前期	4	○「気になる子ども」の支援について、前年度からの引継と共通理解		○始業式 ○入学式 ○健康診断	・前年度の支援カルテ		
	5	○特別支援教育の年間計画と、支援カルテの形式検討 ○校内就学指導委員会	サポート委員会	○校外学習 ○宿泊学習	・年間計画 ・支援カルテ(新) ・就学指導資料		
	6	○「気になる子ども」の支援について、チームでの話し合い ○個別の前期指導計画(支援カルテ)作成 ○「気になる子ども」の支援について全職員の共通理解	ケース会議 サポート委員会	○教育相談 ○創立記念集会	・「気になる子ども」の見取りについての参考資料 ・支援カルテ	○「気になる子ども」の共通理解	○学校の取り組みについて ○学校と家庭との連携について
	7	○保護者との相談についての理解を深める研修	サポート委員会 (校内研修)	○水泳指導 ○1学期終業式 ○夏休み ○保護者面談	・校内研修についての資料	○「気になる子ども」の共通理解 ○LDIについて	
	8	○軽度発達障害についての理解を深める研修 ○前期指導計画の見直し・修正	サポート委員会 (校内研修)	○学力診断結果の分析 ○保護者面談 ○2学期始業式	・校内研修についての資料 ・支援カルテ	○「気になる子ども」の共通理解 ○ADHDについて	
後期	9	○前期指導計画に基づく支援のふり返り、今後の支援について、チームでの話し合い	ケース会議	○運動会	・支援カルテ	○「気になる子ども」の共通理解 ○高機能自閉症について	
	10	○個別の後期指導計画(支援カルテ)作成 ○「気になる子ども」の支援について全職員の共通理解	サポート委員会	○要請訪問 ○陸上記録会	・支援カルテ		
	11	○後期指導計画の見直し・修正		○収穫祭 ○就学時健康診断 ○校外学習(6年) ○基礎学力調査	・支援カルテ	○「気になる子ども」の共通理解	○家庭で心がけてほしいこと ○一人一人の違いを大切に
	12	○チームでの話し合いについての研修(ロールプレイ等)	サポート委員会 (校内研修)	○2学期終業式 ○冬休み	・校内研修についての資料	○「気になる子ども」の共通理解	
	1	○後期指導計画の見直し・修正		○3学期始業式	・支援カルテ	○「気になる子ども」の共通理解	
	2	○後期指導計画に基づく支援のふり返り、今後の支援について、チームでの話し合い ○1年間の特別支援教育の成果と課題の考察	ケース会議	○縄跳び大会 ○新入生入学体験 ○CDT(学力診断テスト)	・支援カルテ ・1年間の取り組みについてのアンケート用紙	○「気になる子ども」の共通理解	○専門機関や相談機関等の紹介
3	○「気になる子ども」の来年度の支援についての共通理解 ○幼稚園・中学校との連携	サポート委員会	○卒業・進級判定会議 ○卒業式 ○修了式 ○春休み	・支援カルテ			

③校内支援組織の整備

(ア) サポート委員会の改善

サポート委員会の推進・運営役として、生徒指導部と特別支援教育部、就学指導委員会を整理統合し、役割を明確にした(表4、図2)。

(イ) ケース会議の設定

支援の方針や具体的な手だてを考えたり、実際の支援を行ったりするため、必要に応じて複数の教師がチームを組めるよう、ケース会議の設定を提案した(図3)。また、ケース会議の際、参加者各々の立場から多くの情報を収集し、視点を明確にして話し合えるよう、支援シートを活用した(表5)。

④実態調査票の活用による実態把握の工夫

担任が、子どもの気になる様子に気付いた場合、どんな点が気になるのかを明確にするため、実態調査票を用いることにした。専門的な知識が不足して

表4. 明確化したサポート委員会の役割

- 「気になる子ども」の実態について共通理解を図り、支援の方針や具体的な手だてを話し合う。
- 校内全体の支援の流れや年間計画について共通理解を図る。
- ケース会議で取り上げる(チームで支援する)子どもを決めたり、ケース会議で話し合った支援方針や具体的な手だてを共通理解する。
- 軽度発達障害等の理解を深める研修を行う。

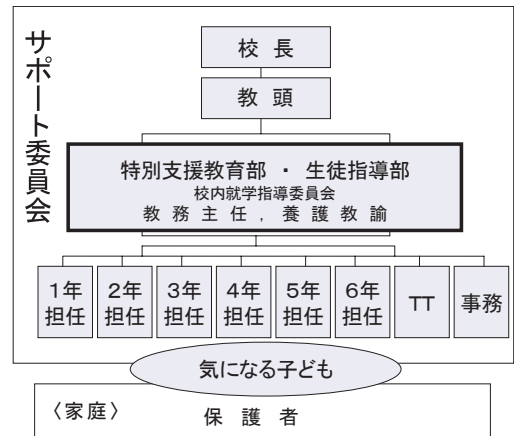


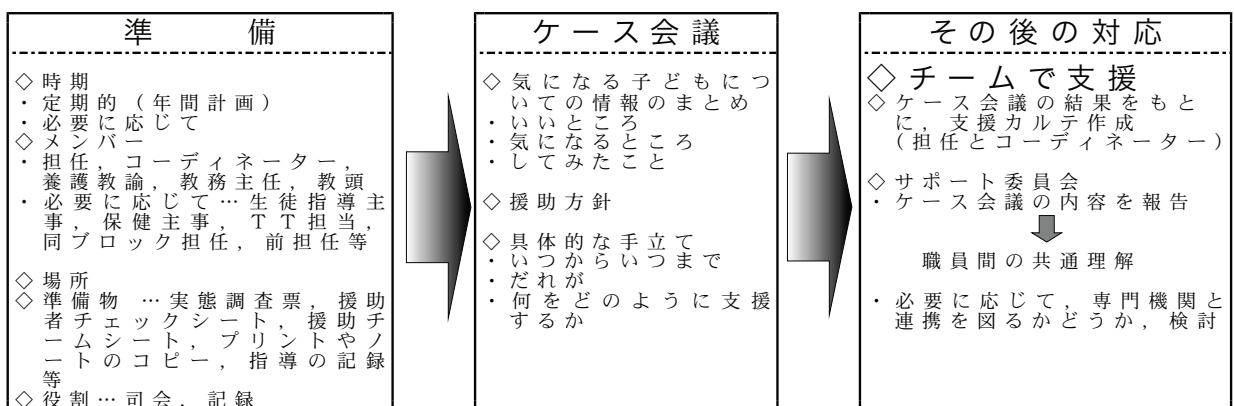
図2. 改善を図ったサポート委員会
太線は、今年度改善したところ

ケース会議とチーム支援について

目的

気になる子どもとかかわりのある複数の教師でチームを作り、子どもの実態を明確にとらえ、支援の方針と具体的な手立てを検討することで、気になる子どもを効果的にチームで支援する

ケース会議の流れ



チームで支援が行えると

- 気になる子どもについての情報が増え、子どもの状況が理解しやすくなる
- 子どもが実践できそうな具体的な支援を提案し、その実践を支援できる
- 担任や保護者など、中心となる支援者を情緒的に支えることができる
- 支援者自身の支援する力を高めることができる

図3. ケース会議の目的と流れについて

表5. ケース会議の資料となる支援シート

【石隈・田村式援助チームシート 5領域版】		実施日 : H17・6・13	第 1 回			
		次回予定 :	第 回			
		出席者名 : 校長・教頭・教務・担任・前担任・ブロック担任・TT・C・養護				
苦戦していること (落ち着きがない。いつもと違う状況になると、パニックを起こすことが増えてきた。)						
児童生徒氏名	知的能力・学習面 (知能・学力) (学習状況) (学習スタイル) など	言語・運動面 (ことばの理解や表現) (上下肢の運動) など	心理・社会面 (情緒面) (人間関係) (ストレス対処スタイル) など	健康面 (健康状況) (聴覚・視覚の問題) など	生活面・進路面 (身辺自立) (得意なことや趣味) (将来の夢や計画) など	
担任氏名						
情報のまとめ	(A) いいところ 子どもの自助資源	・ 一生懸命に取り組む ・ 漢字の読み書き、計算ができる ・ 進め方がわかると、集中すると、家庭学習をよくやる	・ 外遊びが好き ・ 話を理解できる	・ 落ち着いているときは、素直・優しい	・ 健康	・ 入学時は着替え等がうまくできなかったが、すぐにできるようになった ・ 父母ともに本人の教育に熱心で協力的
	(B) 気になるところ 援助が必要なところ	・ 方法がわからないと、泣き出したり、声を出したりする ・ 学習の場がいつもと異なると、落ち着かない	・ いすや床にきちんと座ってられないことがある ・ 走ったりボールを投げたりするときの動き方がぎこちない	・ 「みんなはぼくのが嫌いだ」と話すことがあった ・ 周りの友達からたくさん注意を受けると、パニックになる	・ 弱視(遠視)	・ 母親への依存が大きい
	(C) してみたこと 今まで行った、あるいは今行っている援助と、その結果	・ 全体に指示した後、担任やTT担当が個別に指導し、理解すると自力で取り組む	・ 全校朝会や英会話の前に、担任と本人とで目標を決めたが、我慢できずに動き出す	・ いつもと異なる状況では、担任が近くにつくようにしている	・ 毎月の眼科検診の結果を養護教諭に報告	
援助方針	(D) この時点での目標と援助方針 ・ 本人に安心感を持たせる ・ そのために、本人に見通しを持たせる (普段の学校生活と、場所、メンバー、時間、方法等が異なる場合に、前もってわかるようにしておく) ・ パニックを起こした場合の支援方法を決めておく ・ 母親との連携協力					
援助案	(E) これからの援助で何を行うか	a 英会話の時間(1・2年合同)で活動に参加できないとき:①声をかける②しばらく様子を見る③別な場所または、室内の後ろの方で落ち着くまで待つ b 授業中、わからないことがあったら、手を挙げて待つことを学級で確認する	・ 全校朝会では事前に本人と目標を話し合い、終わってからふり返りをする。よかったところを見つけて、ほめるようにする	※ 学級全体で、一人一人の違いを認めていく指導は普段の学級指導で実施	・ 生育歴や弱視等の情報を調べる	・ 家庭訪問をして、保護者と本人の学校生活について相談をする(学校でのがらんどどもに、気になる様子について少しずつ伝え、学校と家庭とでいっしょに支援していきたいことを伝える)
	(F) 誰が行うか	a 1年担任、担任AET(休み時間にAETと話す機会を持つ) b 担任、TT担当 填補担当者	・ 担任、TT担当		・ 養護教諭	・ 担任(必要に応じてコーディネーターも)
	(G) いつからいつまで行うか	・ 次回から	・ 次回の全校朝会から		・ 6月中	・ 1学期中

参照: 石隈利紀・田村節子共著『石隈・田村式援助シートによるチーム援助入門-学校心理学-実践編-』図書文化社
石隈利紀著『学校心理学-教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス-』誠信書房 (c) Ishikumra & Tamura 1997-2003

いても、項目にそって日常の学習や生活場面で調査でき、「気になる子ども」の実態の共通理解を図ったり、支援の方針を考えたりする際に有効である。表6は、調査票の一部である。

⑤支援カルテの改善

支援カルテは、「気になる子ども」一人一人に応じた指導の計画である。昨年度の形式と保管の方法を見直し、一年を通した支援の流れが見える形とし、学年ごとのファイルにした。また、実態調査票、指導の記録用紙、支援シート等指導の参考となるものもファイルにまとめることで、年度の切替時や中学校への進級時の支援の引継ぎにも役立つと考えた。(表7)

表6. 実態調査票『一人で悩まないで』（平成17年3月 茨城県教育委員会）を参考に作成

A学習面 各領域の合計得点のうち、少なくとも一つの領域で12点以上ある場合、特別な教育的支援を必要とする対象児と考える。

領域	番号	得点のつけ方：0点(ない), 1点(まれにある), 2点(ときどきある), 3点(よくある)	得点	合計得点
聞く	3	・聞き間違いがある(「知った」を「行った」と聞き間違える)		
	4	・聞きもらしがある		
	5	・個別に言われると聞き取れるが、集団場面では難しい		
	6	・指示の理解が難しい		
	7	・話し合いが難しい(話し合いの流れが理解できず、ついていけない)		
話す	8	・適切な速さで話すことが難しい(たどたどしく話す、とても早口)		
	9	・言葉につまったりする		
	10	・単語を羅列したり、短い文で内容的に乏しい話をしたりする		
	11	・思いつくままに話すなど、筋道の通った話をするのが難しい		
読む	12	・内容をわかりやすく伝えることが難しい		
	13	・初めて出てきた語や、ふだんあまり使わない語などを読み間違える		
	14	・文中の語句や行を抜かしたり、繰り返し読んだりする		
	15	・音読が遅い		
	16	・勝手読みがある(「いきました」を「いました」と読む)		
書く	17	・文章の要点を正しく読み取ることが難しい		
	18	・読みにくい字を書く(字の形や大きさが整っていない、まっすぐに書けない)		
	19	・独特の筆順で書く		
	20	・漢字の細かい部分を書き間違える		
	21	・句読点が抜けたり、正しく打ったりすることができない		
	22	・限られた量の作文や、決まったパターンの文章しか書けない		
計算	23	・学年相応の数の意味や表し方についての理解が難しい(三千四十七を300047や347と書く、分母の大きい方が分数の値として大きいと思っている)		
	24	・簡単な計算が暗算でできない		
	25	・計算をするのにとても時間がかかる		
	26	・答えを得るのにいくつかの手続きを要する問題を解くのが難しい(四則混合の計算、二つの式が必要な問題)		
	27	・学年相応の文章題を解くのが難しい		
推論	28	・学年相応の量を比較することや、量を表す単位を理解することが難しい(長さやかさの比較、「15cmは150mm」)		
	29	・学年相応の図形を描くことが難しい(円やひし形などの図形の模写、見取り図や展開図)		
	30	・事物の因果関係を理解することが難しい		
	31	・目的に沿って行動を計画し、必要に応じてそれを修正することが難しい		
	32	・早合点や、飛躍した考えをする		

⑥家庭との連携協力

(ア) 保護者との相談

家庭の理解や協力を得るため、保護者とより積極的な相談ができるよう、教職員向けに「相談時の留意点」についてまとめたものを提示した。(資料は略)

(イ) 保護者への理解啓発

特殊学級等がなく、近隣に相談する機関等も少ない本校では、保護者が相談する機会に恵まれず、不安を抱えている場合がある。そこで、学校だよりに学校と家庭との連携協力を呼びかける記事を載せた。(資料1)

⑦その他の取り組み

(ア) 夏季休業中に、国立特殊教育総合研究所の方を講師として、特別支援教育に関する校内研修会を開催した。隣接の幼稚園の先生にも参加を呼びかけ、具体的な支援のアドバイスを受けた。

(イ) 地域の養護学校との連携を図り、具体的な子どもの支援方針についてアドバイスを受けた。

3. 研究のまとめ

本校のような小規模の学校は、教職員の共通理解が図りやすく、学校全体で温かな支援ができると

表7. 改善を加えた支援カルテ

		前 期		後 期	
		学 習 面	生活・行動面等	学 習 面	生活・行動面等
子どもの実態	よ さ				
	気になるところ				
保護者の願い					
支援方針					
具体的手立て ○/△/◇ ○だれが ○どのように					
変更と課題					

いうよさがある。そこで、小規模の学校においては、より効率的な支援体制を整えることと、教職員が「気になる子ども」一人一人に適切に指導する力を高めることにより、校内の支援する力を高める研究に取り組んできた。これまでの実践で、気付かなかった子どもの実態がつかめ、支援方針や具体的な手だてについての情報を共有化できたこと、また、教職員同士が互いのもっている経験やノウハウに気付き、教職員の数は少なくとも連携協力することで「気になる子ども」や担任を支えることができるようになることを実感できた。

小規模で特殊学級等がなく、専門的な知識や経験をもつ教職員が不足している学校における「気になる子ども」の支援体制の在り方を、コーディネーターの取り組みを通して研究し、次の結果が得られた。

- (1) 昨年度の取り組みを見直し、支援の流れの明確化や校内支援年間計画の作成、組織の改善、実態把握の工夫、支援カルテの改善、家庭との連携・協力に取り組むことで、共通理解の得られるより効率的な支援体制

資料1. 保護者向けの「スマイルコーナー」(学校だより)

スマイルコーナー 1

(子どもたちみんなが、生き生きと学校生活を送ることができるように)


こんなことが気になっていませんか？

うちの子、算数は得意なのに、漢字は何回練習しても正しく覚えられないのは、どうしてなのかしら？

ひらがなも漢字も習った文字は読めるのに、音読をすると、同じ行を読んだり、行を読みとぼしたりして、うまく読めないことがあるわ。


会話の中で、急に話題がとんだり、違う方向にずれることがよくあるのよね。

なかなか親しい友達ができなくて、心配…



その他、計算はできるのに文章題になると解けなくなったり、落ち着きがなくいつも体のどこかを動かしていたりするなど、お子さんの様子で、心配に思われていることはありませんか。

学校では、子どもたちが自信をもち、安心して学校生活を送ることができるよう、学習面や生活面、友達とのかかわり等について、ご家庭で心配に思われることをいっしょに考えていきたいと思っております。気になることがありましたら、担任や、その他相談したいと思う先生に、いつでも声をかけてください。電話や連絡帳等を通してでも結構です。



を整えることになる。

- (2) 「気になる子ども」の支援について教職員全員（サポート委員会）やチーム（ケース会議）で話し合い、それぞれがもっている経験やノウハウを共有することで、「気になる子ども」一人一人の特性を理解し、対応する教職員の指導力を高めることになる。
- (3) 小規模で特殊学級等のない小学校においては、コーディネーターは、自身の専門性を身につける研修を行うとともに、校内の人的資源を把握し、教職員間の緻密なネットワークづくりが重要であることが分かった。

4. 今後の課題

- (1) 小規模校の校内支援体制を整えていくためには、支援体制や支援の方法をその都度見直して問題点を改善し、より効率的な支援体制を目指したい。
- (2) 「気になる子ども」の障害の状態や程度等により専門的な判断や適切な指導が必要な場合は、外部の専門機関や専門家等と連携が図れるよう、連絡先等を示した連携マップを作成し活用していきたい。
- (3) コーディネーター同士のネットワークを広げ、コーディネーター自身の校内支援の推進力を高めていきたい。また、小規模校同士の連携も大切にし、それぞれの取り組みのよさを共有して、校内支援体制を整えていきたい。

〈主な参考文献〉

○茨城県教育委員会

「LD、ADHD、高機能自閉症等の児童生徒への支援の手引 一人で悩まないで」平成17年

○石隈利紀・田村節子著「チーム援助入門」図書文化、平成15年